

貧困の連鎖解消に関する実践的研究

勝岡 幸雄（副校長）
鈴木 一成（理科）
上園 悦史（社会科）
大熊 誠二（保健体育科）
酒井やよい（家庭科）
塚越 潤（養護）

要約

現在、OCEDの調査や様々な研究において、日本における子どもの貧困率の高さが指摘されている。こうした背景に鑑みて、内閣府は「子どもの貧困対策に関する検討会」を発足させ、今後の基本方針となる「子どもの貧困対策大綱」をまとめた。「子どもの貧困対策大綱」においては、学校を子どもの貧困対策のプラットフォームと位置付けており、今後は学校教育においてどのように貧困を取り扱うのかが焦点の課題となっている。

本研究では、学校教育がどのように貧困の連鎖解消に寄与できるかを論考することにより、すべての子どもが当事者意識をもって貧困について理解することが重要であることが明らかとなった。さらに教科横断的な視座から、各教科において貧困を深く理解するための授業実践を行った結果、貧困について多角的なアプローチを行い、子どもが具体的な課題を学習することを通して、貧困についての理解を深められることが示された。

キーワード 貧困教育、貧困の連鎖、学校教育、教科横断的な学習活動

I 問題の所在

現在、日本における子どもの貧困率の高さが大きな問題のひとつとなっている。

OCEDの2009年統計調査によれば、日本の相対的貧困率（可処分所得が中央値の半分以下の世帯）は16.0%であり、イスラエル、トルコ、チリ、アメリカに次いで5番目に高く、OECDの平均である11.3%に比べても高い値を示している¹。これは、子どもの貧困率についても同様であり、同年の2009年における子どもの貧困率は15.7%と高い値を示している²。

こうした貧困世帯においては貧困の連鎖が起こることが指摘されている^{3,4}。例えば、道中は生活保護受給世帯の世帯主が過去の出身世帯においても生活保護を受給している世帯が390世帯中98世帯(25.1%)であることを示し

ている⁵。また、小西は貧困という経済的な困難が、不十分な衣食住、適切なケアの欠如、文化的資源の不足、低い自己評価などの要素と密接に関連しており、こうした家庭の子どもが次の貧困を生み出し、結果的に貧困が連鎖することを指摘している⁶。さらに、青砥はこうした貧困家庭においては、親自身が丁寧に子育てをされておらず、結果として子育ての方法を親が分からないため、子どもが十分にケアされていない状況があることを示唆している。こうして十分にケアされていない子どもは学校教育に適応することが難しいため低学歴になりやすく、結果として貧困の連鎖を生み出す要因となるのである⁷。

こうした背景に鑑みて、内閣府は「子どもの貧困対策に関する検討会」が発足し、今後の基本方針となる「子どもの貧困対策大綱」がまと

められた。「子どもの貧困対策大綱」においては、学校を子どもの貧困対策のプラットフォームと位置付け、総合的に対策を推進する重要性を指摘しており、学校教育がどのように貧困問題を取り扱うのが焦点の課題となっている⁸。

そこで本研究においては、学校教育がどのように貧困の連鎖解消に寄与できるかを論考し、さらに教科横断的な視座から、貧困の連鎖解消に寄与する具体的な授業を提案する。

II 授業実践における重要な視点

「子どもの貧困対策大綱」においては、学校の役割を、①学校教育による学力保障、②学校を窓口とした福祉関連機関との連携、③経済的支援の三つであるとしている⁹。

②の視点においては、学校が閉鎖的な活動することなく、福祉関連機関と適宜連携を取ることが必須であることを示しており、③の経済的な視点においては、家庭を含めた行政的な学習支援が重要であることを示している。これらは換言すれば、学校教育が閉じることなく、第三者機関と柔軟に連携を取ることが必要であることを示している。これは同時に、学校単体の活動として考えた時には、これらの役割を果たすことが難しいことを示している。したがって、学校が貧困という問題に迅速にかつ直接的に寄与することができるのは、①の視点である学校教育による学力保障であると考えられる。

学力保障の観点から貧困についての教育を考えると、まず、貧困状況にある当事者の子ども自身が貧困について十分に理解することが重要であると考えられる。貧困の連鎖を断ち切るには何よりも対象である子どもが当事者意識を持ち、貧困について正確に理解することが貧困の連鎖を断ち切る端緒であると考えられるからである。一般的に、貧困は家族・家庭の役割と責任であるとの考えの影響から、子どもの貧困は見えにくく、捉えることが難しいと考えられている¹⁰。そのため貧困を深く理解するにあたっては、絶対的貧困と相対的貧困といった貧困についての様々な視点が有用であり、こ

れらの視点を学校教育において、取り扱うことが重要であると考えられるのである。

さらに、平田は、どの子どもに対しても将来的に貧困状態に陥る可能性が考えられることから、貧困状況にある子どものみならず、すべての子どもが当事者意識をもって貧困に対する理解を深めることが重要であると指摘しており¹¹、OECDのキーコンピテンシーにおいても、「自律的に活動する」というカテゴリの中で「自分の環境を理解してその働きを知る」ことが必須であることから、貧困問題に対する学習は全ての子どもにとって必要であることは明らかである¹²。これは21世紀型スキルにおいても「個人の責任と社会的責任（異文化理解と異文化適応能力も含む）」という項目においても、キーコンピテンシーと同様の視点で捉えられる¹³。つまり、学校教育における学力保障としては、貧困状況にある子ども、そして将来的に貧困に関連する可能性があるすべての子どもが当事者意識を持ち、貧困について深く理解することが重要なのである。

そこで本研究においては、教科横断的な視座から、社会科、保健体育科、家庭科、道徳等において、貧困を深く理解するための授業をデザインし、授業実践の分析からその有用性を明らかにする。

III 平成28年度の社会科・家庭科連携の授業実践における貧困教育の視点～社会科編～

1. 貧困をめぐる学習を取り上げることの意義

貧困の問題は発展途上国に限った課題ではない。2012年の日本の相対的貧困率は16.1%と過去最悪を更新した。生活保護受給者も217万人と過去最多に上る。相対的貧困率とは、国民の所得分布の中央値の半分（2012年は122万円）未満である状態を示す。厚生労働省が2014年7月にまとめた「国民生活基礎調査」によると、日本人の6人に1人が「相対的な貧困層」に分類されることを意味する。

これまで中学校の社会科教育では貧困につ

いての学習を、地理的分野及び公的分野における持続可能な発展を視点として発展途上国の問題として扱うことが多かった。言い換えれば必要最低限の生活水準を維持するための食糧・生活必需品を購入できる所得・消費水準に達していない絶対貧困者が、その国や地域の全人口に占める割合の問題を取り上げてきたわけである。筆者も第1学年地理的分野において、南アジア地域のバングラデシュを扱って「世界の最貧国」とよばれていた国がその問題の克服に向けて取り組む姿を通して私たち日本の社会に潜む貧困問題に目を向けさせる契機とする学習を行った。(2016年11月)

授業実践を通しての課題として、貧困に対する生徒の認識は、「窮乏状態」だけが貧困の問題であるという意識が極めて強いことが明らかとなった。つまり貧困とは飢餓などの窮乏した状態になって始めて貧困と捉えるような認識形成がなされているのである。しかし、生活保護受給者も217万人と過去最多に上る日本の現状を決して見過ごすことはできない問題である。

従って、今回取り上げる実践は、絶対的貧困の問題を取り上げた南アジアの学習を踏まえ、もう一つの指標として相対的貧困を取り上げ、日本の社会に潜む貧困に着目させることで、生徒の貧困の問題に対する認識に変容をもたらす、格差社会の実態をより多角的な視点から考察するための思考枠組みを提供することを目的として授業を構想した。

2. 100円で朝食をつくる授業実践

この実践は家庭科で「100円朝食を作る」調理実習の事前授業という位置づけで構想したものであり、なぜ100円で朝食を作るのかという背景となる問題に生徒たちの意識を着目させることを主眼としたものである。また、本授業の構想に際しては2015年度に授業を行った渡邊智紀氏の実践を基に、一部を修正し実践したものである。

(1) 授業の目標

・日本社会に格差が拡大している現状を知り、その原因を探ろうとする意欲をもち、日本の相対的貧困の現状を理解する。

(2) 授業の展開

授業ではワークシートを活用し、まず導入で、生徒に3つの質問を行った。①私たちは1ヶ月に平均どのくらい食費をかけているだろうか。②1食を100円で過ごすと、食費はいくらになるだろうか。③1食を100円で抑えたいと考えるのはどのような状況だろうか。の3つである。①については500円から1000円という生徒の解答も幅があるが、1ヶ月相当にすると4万5千円から9万円という金額になることを計算させた。②は1ヶ月あたり1万円以下という数字になり、生徒にとっては「あり得ない」想定できない数値である。③については貧困や飢餓、突然の倒産、リストラ、失業など、日常とは異なる状況が生じた状態であるという言葉が並ぶ。

次に展開部分では、統計資料「単身世帯の消費支出」(総務省統計局平成27年)から、単身世帯の消費支出の金額(約16万)に着目させ、初任給20万とすると、そこから税金や保険料を差し引くとどのくらいのお金が手元に残るのか、計算させる。すると2万たらずのお金しか残らず、単身世帯の食費の平均支出は4万円であることから、支出を切り詰めなければ生活ができない実態が明らかとなり、①の数値を改めて厳しく見直す必要を知る契機となった。

さらに日本の相対的貧困率の推移や2000年代半ばのOECD各国の相対的貧困立の統計資料を見て、絶対的貧困と相対的貧困の違いを理解し、相対的貧困率で日本は、OECD平均値を超えており、世界水準でみたら高い水準であることへの驚きとその原因を知ろうという関心を持たせるように指導した。さらに日本の子どもの貧困率にも着目し、社会がますます豊かになり、一般的な水準が上がっていくのに対して、その水準から落ちこぼれてしまっている子どもたちが6人に1人の割合がいるという現状にもふれた。

(3) 授業のまとめ

最後にまとめとして、「もしフリーターが最低賃金（東京都＝932円／時間）で1か月（1日8時間、20日間）働いたら、収入はいくらになるか？」という問をたて、非正規労働者の立場から日本の貧困の現状を考察することで、格差の問題に着目させた。格差の拡大について、日本の正社員と非正規労働者の生涯賃金の格差（約1億円）が大きく、さらに男女差もみられることや、非正規労働者数の推移からその割合も全雇用者の4割弱（2013年度総務省調べ）を占めることなどの資料を照らし合わせながら、現実社会の実態を考慮してシミュレーションを試みた。すると、収入から支出を計算すると手持ちに1万円から2万円たらずしか残らず、その中から食費や貯蓄を捻出するという実態が明らかとなる。この時点で生徒たちの認識には相対的貧困の実態が現実味を帯びて実感されるようになってくる。

3. 授業の成果と課題

本授業の目的は2つあった。一つ目は、貧困の問題には絶対的貧困と相対的貧困の指標があり、それぞれに国や地域の課題や問題は異なるが、日本も含め、その克服に向けて取り組むことの重要性を認識すること。二つ目は我が国の貧困の現状を知り、その理解を踏まえて自らの生活を振り返り、課題意識を涵養することである。実際に授業を終えた生徒の授業の感想から「私たちがこうして贅沢に食事ができているのも、考えなければいけないことが多くあると思いました。将来、仕事などでも上手くいかなかったことや、世の中にも貧困の人がいるということを見ると、1食分にけるお金は考えなくてはいけないと実感しました」というように、貧困に対する認識の変容と自らの生活への振り返りがなされていることがわかった。さらにこの授業は、家庭科の調理実習との連携を意識している点において、社会科だけで完結せず、調理実習への取組にもプラスの効果も期待できることも重要である。

一方課題として、格差を考える時には二つの

視点があることにも注意したい。それは結果の格差と機会の格差である。前者は人々が勉強や労働などの成果として受け取る賃金や報酬であり、その一部を貯蓄して資産を獲得するものである。後者は、努力をする以前の問題として存在する条件の差の問題である。すなわち、誰にとっても平等に開かれているはずのチャンスがあるか、ないか、または奪われているか、という問題である。この両者を区別することが重要なのは、そもそも機会が平等に与えられていないとしたら、それは人間社会において、自由・人権と同様のレベルで一人一人に確保されなければならないという意識を持つことにつながるためである。世界の富の集中は、ごく一部の富裕層に占められている。何十億も稼ぐ人もいれば、そうでない人々もいる。この格差は人間社会で正しいことなのか、貧富の格差を小さくするために、富裕層により多くの税金を徴収して貧困層に配分する（所得の再分配）ことが正しいのか、所得の格差をどこまで社会が認めるのか、といった一人一人の価値観に深く切り込むような取組を続けていかなければ、この授業の本質的な課題には応えられないと強く感じている。その点を踏まえて、本実践の成果と課題としたい。

IV 平成28年度の社会科・家庭科連携授業実践における貧困教育の視点～家庭科編～

1. 相対的貧困を家庭科でとりあげる理由

厚生労働省の発表によると、子どもの相対的貧困率は16.3%（2012年）と、過去最悪となった。また、耳塚ら（2014）によると、収入と学力に相関がみられるなど、子どもの貧困が将来にわたってその子の人生設計に影響を及ぼし、貧困の連鎖が続いていくということも考えられるように、貧困は個人間の生活格差の問題にとどまらない、大きな社会問題であると考えられる。政府も、平成26年1月17日に施行された「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を制定し、同年8月29日には「子供の貧困対

策に関する大綱」(以下、「大綱」)を閣議決定するなど、社会全体で子どもの貧困解消に向けての取り組みを進めているところである。このような流れを受け、学校でも相対的貧困について正しく理解し、ともに助け合う包摂型社会を作ろうという意識を中学校の3年間を通して生徒に育成していく必要があると考える。また、現代社会では様々な理由から、誰でも相対的貧困に陥るリスクがあることから、貧困を断ち切り、これからの社会を自立してたくましく生き抜くことができる生徒を育成していく必要があると考える。以上のことから、本単元を社会科と家庭科の協同で設定した。具体的には、相対的貧困(社会的事象)の理解を図る部分を社会科が、それを受けて具体的な生活上の自立の工夫を考えさせる部分を家庭科が中心となって構想した。

2. 社会科との連携授業での家庭科の視点

家庭科の「食生活と自立」の単元のまとめとして、限られた予算で作る献立の作成とその調理の授業を計画した。今回教科間の連携を行った背景には、限られた時間数で高い教育効果を発揮させるためのカリキュラム・マネジメントの必要性が叫ばれていることがあげられる。社会科の経済単元で具体的な消費の様子をイメージしながら、限られた収入をどのように消費に振り分けていくかを実感をともなって理解することが可能である。逆に家庭科の立場からは、食費のみならず多様な消費項目があり、それらも考慮しながら食材を購入したり家計を維持していくという、実際の家庭生活に即した学習が期待される。また、国立大学附属中学校の卒業生を見ると、社会的、経済的、学問的に主導的な立場を担っている方々も多い。それゆえ竹早中学校の生徒に、道徳のみならず各教科の教育活動を通してこれからのよりよい社会の在り方や自己の生き方について深く考えさせる機会を取り入れていくことは、将来の社会をよりよく変えようとする動きを大きなものにしていくことにつながると考える。

3. 百円朝食の授業実践

(1) 指導観

本校中学校第1学年の生徒は学習意欲も高く、多くの生徒に「新しいことに対して前向きに学習に取り組もう」とする態度が見受けられる。それゆえ、本来社会科の第3学年で取り扱う内容ではあるが、第1学年においても言葉を分かりやすくしたり、計算の数値を単純化したりするなどの工夫をすることで、問題なく学習に取り組めると判断した。これは、公立学校においても無理なく実施できる範囲の学習であると考える。また、国立大学附属中とはいえ、家庭的に課題を抱える生徒が全くいないわけではないため、個々の家庭の状況には十分配慮し、生徒が貧困家庭に偏見を持ったり、過度にステレオタイプを形成しないよう配慮して教材を選択した。

(2) 単元の目標 【資料Ⅰ】に掲載

(3) 指導計画 【資料Ⅰ】に掲載

(4) 第3時指導案 【資料Ⅰ】に掲載

(5) 評価 【資料Ⅰ】に掲載

(6) 今後の課題 【資料Ⅰ】に掲載

V 保健体育科における貧困教育の視点

1. 実践における視点

実践では、まず現在の状況を整理すること、つまり世界で起こっている状況を、「自分事」として捉えさせることをねらった。なぜなら、いわゆる「対岸の火事」として貧困教育を捉えてしまっているのは、机上の空論だけで授業が終了してしまう危惧があったからである。

世界では日本人の総人口の約10倍にあたる約13億人の人が、絶対的な貧困に苦しんでいる。しかし、飽食の時代といわれる現代の日本を生きる生徒たちのみならず、筆者を含む多くの人たちにとっては、現状は知ってはいるが、自分事として感じる事が難しい。そこで、実際の人口との比較などの具体的な数字を示し、自分事として感じられるような導入を行った。また、貧困というものは絶対的な貧困だけでなく、相対的な貧困があるという事実を基に、視

点の広がりを目指した。最近、日本では相対的な貧困率の上昇が社会問題として取り上げられている。そこで、今の日本において生じている相対的貧困に対して焦点をあて、「包摂的な社会の構築」という大きい視点を育んでいく素地を養わせることをねらった。

貧困における問題の一つとして「選択する可能性が閉ざされること」が考えられる。つまり、貧困によって、本来であれば存在したはずの可能性が存在しない状況になるのである。本校においては、入試という制度によって入学する生徒が学年の約半数を占める。だからこそ、「選抜された」という意識から、「選抜されたからこそ」という視点を強く持たせ、自分は今の時代を生きる「一人の人間」であり、社会において果たすべき役割があるという意識を持たせる事が大切になってくると考える。モノが溢れる豊かさにありながら、格差社会とも揶揄される現代において、様々な立場で今後の包摂型社会を見据えることのできる人間育成の教育活動として、本実践を位置づけた。

日本における相対的貧困率は、年々上昇しており、子どもの貧困率では6人に1人が相対的貧困という現状を迎えている。だからこそ、貧困問題に対する教育活動は急務であり、かつ長期的に継続されなければならない。その縁遠い貧困問題の話をどのように「自分事」として捉えていくことができるか、という視点に立った時に、自分の現在の生活における状況をロールプレイなどの手法を用いながら取り入れ、より題材の意味を身近に感じることができるような題材を設定することで、対岸の火事ではなく、今の時代を共に生きる者として、この状況に伝えていくことのできる人間の育成を目指したい。現在の貧困を視点にした日本や世界の状況を知ること、今後の生活の中で活かすことのできる知見を深めさせる。

本時における実践のねらいとしては、

- ・貧困を自分が今生きている時代に、同じ地球上で起こっているという現状を理解する。
- ・絶対的貧困と相対的貧困の違いを理解しながら、世界へ向けて多くの視点を持たせる。

- ・貧困は、自然災害や色々な状況からも陥ることがあるという認識を持たせ、貧困問題に触れることで、今の社会状況や自己の生活を振り返り、自分自身や他者にとって、より充実したものを見つけていこうとする素地を養う。

として、個別学習、グループ学習を有機的に用いながら実践を進めた。

2. 実践における考察

次に実践後の生徒の感想を挙げる。

- ・日本の中でも貧困は存在し、自分にとって関係がない話とは思えなくなり、深く考えることができた。日本の経済状況がよくても貧困の変化があるので、少し難しく感じました。

- ・今、僕は貧困の状態ではないが、3.11の時のような天災などの思わぬ形で財産や命を失うことがあるかもしれないということを改めて感じた。貧困は遠いようで近い存在なのかもしれないと思った。

- ・今まで日本は貧困とは無縁だと思っていたけれど、日本の6,7人に1人の子どもが貧困であると知って、とても身近に感じた。いつ地震などで親を失くし、貧しくなるか分からないので人ごとだけとして考えるのではなく、自分のこととしても考えていきたい。

- ・学校に行きたくても学費が払えなくて学校に行けないのがとてもかわいそう。その人たちの為にも学べる自分がしてあげられることを探して行きたい。貧困のことをもっと知りたいと思った。

- ・日本でも16%の人が相対的貧困なのには驚きました。自分は今の状況でも不自由な生活をしていると思っていたが、前回と今回の授業で違うのだなと思った。改めて、自分が生活している状況に感謝したい。

- ・自分は今、良い生活を送っているが、それを当たり前だと思ってはいけなかった。しかも、自然災害などで、それがいつ失われるは分からないので怖い。改めて、お金と向き合うべきだと思う。

- ・世界では貧困が深刻化してきている。どこかで遠い話だと思ってしまっていたが、日本でも

年々相対的貧困率が上がっている。また、震災などの自然災害で子供も貧困になってしまうこともあることが分かった。私も自分の事として考えて協力出来たら良い。

・「貧困」について今まで知らなかったことを沢山知ることができました。私は、自分自身も周りの友達も授業で習ったような「貧困」に当てはまる人はいないので、なかなか事実としてとらえにくいですが、このような現実があることを知って、私自身の置かれた立場が恵まれたものであることに気づきました。これから、「貧困」について考えを深めていこうと思います。

・画像や映像などを見て、他人事で済ませてはいけなかった。自分は今まで貧困の事など考えていなかったが、日本でも貧困の方が居ることを知り、何かできることを探したいと思った。

・貧困の事を学んで、自分がお金を持ってない、使えないなどと言っていることがとてもむなしく、恥ずかしく感じて、食べられる時、遊んでいる時が当たり前という意識を変えようと思った。

・日本は先進国で豊かな国だから貧困は無いと思っていたが、日本、そして世界にもたくさんの貧困の人たちがいたと知った。今は、インターネットで世界の人々が色々な事を見ることが出来るから、世界中で貧困の人を助けていくべきだと思う。「自分に関係ない」というのではなく、同じ人間として貧困について考えるべきだと思う。

・自分が恵まれた(!?), いやその意識もない環境の中であらゆる災害やテロ、戦争で傷ついてきた人がいるというのは知識として知っていたが、その要因が自分たちにもあり、自分たちも考えなければならない問題だということを知ることができた。それはこれからの自分に活かしていきたいと思う。

・前回の授業に続き、世界の貧困の状況について知り、衝撃を受けました。私たちは何不自由なく生活できているのに、ここまで多くの人たちが1日200円で生活しているなんて…。東日本大震災の映像からも感じることはたくさ

んあったので、決して他人事にはしてはいけないと思いました。

仮説通り、多くの生徒が授業前には「対岸の火事」としてしか、貧困問題を捉えることが出来ていなかった状況が分かった。貧困の定義、貧困の現状、貧困に至る理由等々のことを、資料や映像を教材として、生徒と共に考えを持つことができた。ここに挙げた他にも、「貧困を他人事として捉えていた。知らなかった」等の感想は多数みられたが、それと同時に「この現状を自分事として捉えていきたい。自分にも何かできることをしていきたい」といった意見も多く見られた。

しかし、実際には、貧困を自分事として捉えていく事は非常に困難なことだと感じる。だが、本実践を通して貧困の状況を「自分事」として考え始める「起点」とすることができたと考える。この一筋の光を見失わず、継続的な指導や関わりによって、より多くの光を集め、包摂型社会の構成者になる人材の育成に寄与していきたい。

VI 養護における貧困教育の視点

<研究の動機と目的>

昨年度の取り組みを受け、今年度は、貧困についての教育に携わった教員の取り組み前後の心理的な変化や教員としての意識の深まり、教員自身の教育観への影響に着目し、研究に取り組んだ。学校教育で貧困を取り扱うにあたり、生徒だけでなく授業者にとって貧困とその授業が与える影響を調査したいと考えたからである。本研究では、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(m-GTA)を用いて、教員の授業前後の心理変化のプロセスを概念化し、貧困の授業を行うことが教員に与える影響を図示することを目的とした。模索の過程も含めて教員が相対的貧困という現代の課題をどう受け止め生徒に伝えるかを明らかにし、それをもとに、学校教育において、貧困についての学習は今後どのような在り方を目指すべきかを探りたい。

<昨年度の実践経過>

昨年度、貧困についての授業を行うにあたって、健康教育では授業のねらいを「貧困を乗り越える大切な資源として健康を捉え、それを活かせる社会について考えること」とし、それを基に授業を構成することにした。しかし、多様性を重視し尊重する社会においては「健康」も一律ではない。WHOの定義する「肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること（日本WHO協会訳）」は、あまりにも狭義ではないかという意見に裏付けられるように、パラリンピックを例にとれば、運動量の多いスポーツに取り組み成果を残しつつも、障害があるという理由1点において選手たちは「健康ではない」とされるのであろうか、という問いが自然に生まれてくる。「健康でありたい」と願う場合の目標として「肉体的にも精神的にも社会的にも満たされた状態」であることは良いことであるが、「自分は健康だろうか」と問うた時に、先天的な障害がある場合や事故などで後遺症が残った場合、一生「健康」にはなれないと思わなければならない。「健康」が自己否定や差別化の基準のひとつにならないこと、「健康」は資源であって条件ではないのだということを生徒に感じてもらいたい。あらためて、生徒が納得できる「健康」の定義を考え、その上で、「健康」は個人のものだけではなく、集団として健康であることを意識させたい。ということ、まず授業を組み立てる段階で考えた。貧困について生徒と一緒に考えてみたいというのが今回の取り組みの当初の動機であったが、その過程で、日頃から自身が潜在的に持っていた「健康教育」の土台となる部分と、学校という組織に対する願い、生徒の学びへのねらいが思いがけない形で意識化されることとなった。

授業準備の段階で、本研究に取り組む他教科の教員と協議するうちに、自分も含め教員の中で貧困に対する意識や思いが変化していくことを体験した。

また、実際に貧困についての授業を組み立てる際、貧困についての知識や情報の蓄積と思考

の反復により内省的な思考が増えていったという教員の話聞き、貧困について教えようとする自体が、意識の表層にあらわれにくい「生きるとは」という問いについて考える機会となる可能性が示唆された。

子供は常に成長の過程で、特に思春期においてそうした問いを持ちつつも、誰かにそれを頻繁に問うということはしない。学校教育の様々な場面で、それを考えるきっかけは存在すると考えられる。しかし、あらためて「みんなで考える」「共有する」といった機会は、道徳以外の教科ではなかなか持てない。まして教員は、そのことについてじっくりと考え、同僚と共有することはほぼないのではないだろうか。

<半構造化インタビューから>

授業実践の詳細については平成28年度の本校研究紀要を参照されたい。授業者の動機は様々ではあるが、「以前から貧困について授業で重点的に取り上げていた」という者はいなかった。大学のプロジェクトとして断れなかった、ハード面の充実のために受けた、等の回答があった。自発的な動機でなくても、教えていくうちに教員自身の内面に変化があり、貧困に対する授業を前向きに捉える様子が伺えたこと、生徒に伝えたいと思う事柄が徐々に増えていったことは興味深い。それぞれ専門の教科でも同様の経験をしてきたと想像されるが、それが貧困についての授業とどこが違い、どこが同じなのか今後検討したい。

今回、インタビューに協力してくれた教員からは授業に関して、難しさよりはむしろ「これでいいのか」という途惑いが多く語られた。それに次いで、自分の専門教科へ貧困についての内容を取り込んでいく際、どのような切り口にするか、どう生徒に考えさせるか、などの迷いが生じ始めるが、その点に関しては授業者の経験や教育技術によって乗り越えている。一方で、いくつかの段階を経た後に貧困に対する教員自身の考えが明確になり、授業の中で生徒に話し合いの中でたどり着いて欲しいと思う回答が得られると、授業に対してだけでなく、教育を行うことや教員であることにおいても前向

きに捉える発言が見られた。印象に残ったのは「70億人の幸せを目指してもいいんじゃないかと思う」「生きることを楽しむことを大人が示さなければ」といった発言である。これらは、貧困について学ぶことで教員としての思考が深まり、抽象度の高い目標や理想が言語化されたのではないかと考えられる。

<貧困についての教育が抱える課題>

絶対的貧困は様々な方策によって、やがてなくすることができると考えられるが、資本主義社会の中で富む者が増える限り相対的貧困はなくなるのではないかと、という疑問に対してどう答えるかが問われる。また、現代日本において、第二次世界大戦による絶対的貧困を経験している世代が、現代の相対的貧困に対してしばしば「着るものも食べるものもあるのになぜ貧困というのか」という考えを持つが、それを教員がどのように説明できるようになるかも課題である。

相対的貧困の解消の難しさには、相対的貧困に陥っている者自身が、そのことに気づいていないという点にもある。貧困の本質は選択肢を奪われることであると言われるが、当人が選択肢を奪われていることに気づいていないことも少なくない。当人の自覚的な幸福感とは別の相対的な基準に照らしての貧困を、社会がどう解消していくか、授業を通じて生徒と一緒に考えたい課題である。

教員自身も、貧困体験があるわけではなく、自身が学齢期であった時にもそういった教育を受けたことがない者が多い。教える側としても教わる側としても初めてのことを、イメージし、授業の形にしていくことの困難は、貧困についての教育が普及するまでの課題であろう。

<まとめ>

昨年度の授業後に生徒から「相対的貧困と戦うって、絶対に、誰も、ハブらないってこと？」という問いかけがあった。経済的に弱者を排除しないで一緒に生きていくことを目指す、という言葉に対して出た発言である。「包摂型社会」という考えが、相対的貧困に対して有効な在り様であり、生徒にとって自分たちの生活に

引き寄せて考えれば上記のような内容を指すという理解がなされたのだろう。

「包摂型社会」は、養護教諭として集団の健康を考えた際に、深く腑に落ちる考え方であった。人が自分の心身のケアをするように、集団はその集団の弱いところを庇いケアすることで集団の形を保つ。一人が病めば周囲がそれを支え、弱い部分を含んだひとつの集団として存在する。弱さの理由は経済的なものであっても疾患や障害であっても同じである。

今後、貧困に関する授業のマニュアルができ、ある程度の均一さで誰もが授業を行うことができるようになることは、語弊を恐れずに言うならば教員側の学び方が形骸化していくことでもある。そうなる前に、教員が生徒と一緒にあって途惑い、悩み、そして立ち向かう授業を繰り返すことが必要だと考える。

<本研究の今後の課題>

本研究は、インタビュー数が少なくまだ理論的飽和に至っていない。今後、授業者が増加すればインタビュー対象者を増やすことができる。最終的には概念図の作成を目指したい。

Ⅶ まとめ

本研究では、学校教育がどのように貧困の連鎖解消に寄与できるかを論考し、すべての子どもが当事者意識をもって貧困について理解することが重要であることが明らかとなった。さらに教科横断的な視座から、各教科において貧困を深く理解するための授業実践を行った結果、貧困について多角的なアプローチを行い、子どもが具体的な課題を学習することを通して、貧困についての理解を深められることが示された。

また、各教科の授業実践から、以下の点が貧困教育に有効であることが明らかとなった。

- ・社会科では、様々な統計等を用いることにより、マクロな視点で貧困を捉え、絶対的貧困や相対的貧困といった用語についての理解を深め、活用することができた。
- ・家庭科の授業実践においては、実際の相対的

貧困の食事を計画することを通して、実感をもたせて貧困を深く理解することができた。

- ・保健体育科では、貧困教育の実践において、「健康と環境」領域、そして、道徳の領域における「主として集団や社会とのかかわりに関すること」、「世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する」における視点を関連させた実践を意識した。また、健康教育との関連も重視し、健康教育の実践から捉えさせた貧困の状況を手掛かりにして、教科横断的な視点も持ちながら、保健体育分野での学びを深めさせることができた。

VIII あとがき

東京学芸大学が取り組む『附属学校と協働した教員養成系大学による「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト』への協力要請が、平成27年9月竹早地区小・中学校にあった。突然のことで、学校全体で取り組む余裕がなく、中学校としては幾つかの教科・領域において協力ができるに留まった。

しかし、「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」への教育支援という現代的な教育課題に附属学校として取り組むことは、竹早中学校の教育研究における発信の幅を広げるものとの期待が見えてきた。こうして1年半が経過し、ここに幾つかの教科・領域での実践を発信できることに喜びを感じている。

国立大学法人の附属学校には「経済的に困難な家庭の子ども」は少ないであろうに、竹早中学校の発信が理解されるのか、という不安がないわけではなかった。ところが、今こうしてまとめられた紀要内容をみると、最近はその重要性が盛んに言われる「ダイバーシティ教育」の先駆けとなる示唆を多く提示できると自負できるまでになっている。

当然、竹早中学校の取り組みは始まったばかりであるが、これまで培ってきた本校の研究成

果に、本プロジェクトの研究成果を加え、更に先を見据えた先導的な研究となるよう深化させ、現代的教育課題改善のための具体的な方策が発信できるよう努力していくつもりである。

IV 参考資料

- 1 OECD(2010): OECD.Stat “Income Distribution and Poverty” (<https://stats.oecd.org/Index.aspx?DataSetCode=IDD>)
- 2 厚生労働省：『平成22年国民生活基礎調査』(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/2-7.html>)
- 3 厚生労働省(2012)：『「生活支援戦略」中間まとめ—参考資料』, (<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002fjpt-att/2r9852000002fjuw.pdf>)
- 4 宮武正明(2013)：「貧困の連鎖と学習支援」, こども教育宝仙大学紀要, Vol.4
- 5 道中隆(2007)：「保護受給層の貧困の様相—保護受給世帯における貧困の固定化と世代的連鎖」, 生活経済政策, No.127, pp.14-20
- 6 小西祐馬(2009), 子どもの貧困白書編集委員会編：「子どもの貧困を定義する」, 子どもの貧困白書, 明石書店
- 7 青砥恭(2009)：『ドキュメント高校中退—今貧困が生まれる場所』, ちくま新書, pp.143-144
- 8 内閣府：『子供の貧困対策に関する大綱～全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指して～』, (<http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/>)
- 9 同上書, 8) 内閣府：『子供の貧困対策に関する大綱～全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指して～』, p.4
- 10 同上書, 8) 内閣府：『子供の貧困対策に関する大綱～全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指して～』, p.3
- 11 平田知美(2013)：「貧困問題の授業における当事者性」, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, No.23, pp.191-200
- 12 D.S. ライチェン他(立田慶裕:監訳)(2006), 『OECD DeSeCo キーコンピテンシー 国際標準の学力を目指して』, 明石書店, pp.112-113
- 13 P.グリフィン, B.マクゴー, E.ケア(三宅なほみ監訳)(2014)：『21世紀スキル—学びの評価の新たな形』, 北大路書房

【資料 I】 家庭科の授業展開例

(2) 単元の目標

単元名	100円で朝食を作ってみよう
学習の目標 (評価の観点)	①さまざまな情報源から、食材の市場価格等をまとめるとともに、費用対効果のよい食材を選択することができる。 ②相対的貧困の観点から、低価格が必要であることを認識し、100円程度の価格の中で栄養バランスを考え、朝食の献立の具体例を提示し、その理由を明確に説明することができる。 ③調べたことを模造紙にまとめ、発表することができる。

(3) 指導計画

時	分野	主な学習内容
1	家庭 社会	<ul style="list-style-type: none"> 単元のテーマ「100円朝食を作ろう」を提示し、なぜ100円なのか予想させる。 100円の根拠が、相対的貧困世帯の収入をイメージして計算したことを、諸資料から理解させる。 相対的貧困は誰にでも起こりうることであり、社会全体で支えていくことの必要性とあわせて、個人でも生活を切り開くための方策を考えようとする意欲を持たせる。
2	家庭	<ul style="list-style-type: none"> 前時の授業を受け、家庭科における100円「朝食」の献立を考える意義を考えさせる。 スーパーのチラシをもとにグループで食材の価格調査をおこない、100円朝食の材料となりそうなものを探す。
3 本時	家庭	<ul style="list-style-type: none"> 価格調査で見つけた食材を用いながら、栄養のバランスを考え、自分が作って食べてみたい献立の案を一人100円の予算内で考える。 模造紙に、献立や工夫した点をまとめ、班ごとに発表する。 健康を考えた食生活をおくるために、献立作成時に、栄養のバランス、予算以外に考慮することがないか考える。
4	家庭	<ul style="list-style-type: none"> 作成した献立の朝食を調理する

(4) 第3時指導案

家庭科教員が指導 教科書：教育図書「新技術・家庭 家庭分野」平成28年度版

	学習内容・学習活動	指導・支援・【評価】
はじめ	<ul style="list-style-type: none"> ○食材の市場（価格）調査ができているか確認する。 ○班ごとに100円朝食の献立を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のワークシートに食材の価格が記入されていることを確認させる。 ・班ごとに作成した献立と工夫した点を1分で発表することを伝える。
		<ul style="list-style-type: none"> * 5人班を8つ作る。 * 班ごとにiPadを2台づつ準備する。

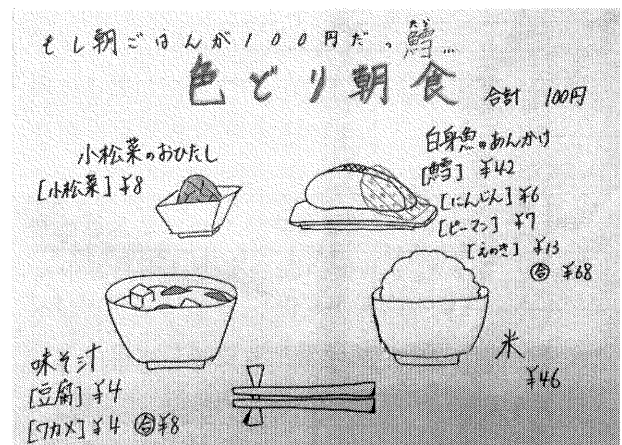
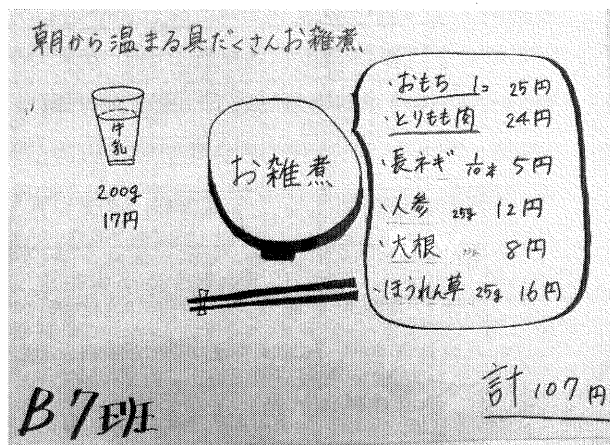
<p>展 開</p>	<p>○献立を考える手順を確認する。 ○iPad を用いてインターネットで検索し、朝食のメニューを考える。 ⇒奇数班は和食の、偶数班は洋食の献立を考える。 ⇒検索したメニューを参考に、食材の一人分の分量を記録する。</p> <p>○献立を立てる→食材の分量→その価格の計算の順にすすめ、食品群別摂取量めやすの1/3を満たしているか、100円以内におさまっているかを検討しながら、献立を決定する。 ○模造紙(1/2)に朝食の献立を書き、食材の分量と価格を加える。内容がわかりやすいよう工夫し、適切な題名をつける。</p> <p>○発表者は、模造紙を活用し、1分でわかりやすく説明する。</p>	<p>*ワークシートを配布する。 教科書 献立の立て方(p.88~91)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もやしは安く、食材がかぶりやすいのでNG食材にする。 ・検索時間は15分とする。 ・「朝食」「献立」「レシピ」「簡単」などのワードで検索させる。 ・コストパフォーマンスのよい食材は何か考えながら献立を立てるようアドバイスをする。 ・100円では無理な場合もあるので、少しは超えてもよいとする。(~150円まで) ・色マジックも使い、料理名、1人分の食材と分量、価格、大きくわかりやすく図示させる。 ・特徴を表すようなタイトルをつけさせる。例を提示する。 (例)「朝から暖まる具だくさんお雑煮」 「ふわとろ卵の和風オムレツ」 「もし朝ご飯が100だっ鱈」など ・食材や献立についての情報を共有し、これからの食生活が工夫できるように考えさせる。
<p>お わ り</p>	<p>○健康を考えた食生活をおくるために、献立作成時に、栄養のバランス、予算以外に考慮することがないか考える。 ○授業で分かったこと等をワークシートに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・食品の安全性(添加物など)、調理時間、ゴミ問題なども考慮した献立作りも重要であることに気づかせる。

(5) 評価

評価の観点	A評価	B評価
<p>①さまざまな情報源から、食材の市場価格等をまとめるとともに、費用対効果のよい食材を選択することができる。 関心・意欲・態度 知識・理解</p>	<p>情報(スーパーのチラシなど)を活用し、食品群ごとに食材の市場価格を調べ、まとめることができる。 同じ食品群の中で低価格のものを選ぶことができる。</p>	<p>食材の価格調査結果をワークシートに記入できる。</p>

<p>②相対的貧困の観点から、低価格が必要であることを認識し、100円程度の価格の中で栄養バランスを考え、朝食の献立の具体例を提示し、その理由を明確に説明することができる。</p> <p>工夫し創造する能力 技能</p>	<p>100～150円の範囲で、栄養のバランスを考えて、一食分の朝食の献立を立てることができる。</p> <p>なぜ、100円で朝食を作るのか理解し、自分の生活に生かそうとしている。</p>	<p>朝食の献立を考え、ワークシートをまとめることができる。</p>
<p>③調べたことを模造紙にまとめ、発表することができる。</p> <p>工夫し創造する能力</p>	<p>発表活動に積極的に関わり、朝食の献立を模造紙に、食材・重量・価格と献立を図示し、献立の内容を表すタイトルをつけて図示し、発表することができる。</p>	<p>発表のための模造紙作りに協力することができる。</p>

[生徒作品]



(6)今後の課題

家庭科では、実習を通して「貧困」を体験できる。その経験から、生活を見直し改善する視点や、家庭環境の変化に対応できる力をつけていきたいと考える。作成した献立をとところまで授業を発展させ、家庭での実践を促していきたい。また、食生活以外でも衣生活・消費生活・住生活と環境の領域でも、実感を持てる授業を実践していきたいと考える。

参考図書：開隆堂『安心して生きる・働く・学ぶ』大竹美登里監修 中山節子・藤田昌